報告

中国の環境教育における
学校・行政・環境NPOの連繫

—南京市龍江小学校の事例—

朱 照明*・呉 銀立*・宋 振亜**・王 麗娜***・諏訪 哲郎****

龍江小学校* 江蘇省環境保護庁宣伝教育中心** 江蘇綠色之友*** 学習院大学****

Cooperation between Schools, Administration and Environmental NPOs
in Environmental Education in China: Case of Longjiang Elementary School in Nanjing

Zhaoming ZHU*, Yinli WU*, Zhenya ZONG**, Lina WANG***, Tetsuo SUWA****

Longjiang Elementary School*, Environmet Protection Center of Jiansu Province**,

Friends of Green Environment in Jiangsu***, Gakushuin University****

(受理日2008年6月13日)

I はじめに

本報告では、中国江蘇省南京市にある龍江小学校（以下、龍江小）における活発な環境教育の実態を紹介するとともに、その背後に、地方行政組織である江蘇省環境保護庁宣伝教育中心（以下、江蘇省環保宣教中心）および南京市に拠点を持つ環境NPO江蘇綠色之友の様々な助言と支援があることを紹介する。

筆者が最初に龍江小を訪問したのは、2005年11月である。江蘇綠色之友などが主催し、日本の国際交流基金北京事務所が資金を提供して開催された「環境教育公衆参加交流シンポジウム」に招かれたついでに、龍江小の児童や先生に環境教育の何らかのアクティビティを実施し、日本の環境教育の現状について簡単に紹介することを求められるという経緯であった。その時は北京から招かれた李力氏（環境NPO・環境友好公益会代表）が児童に対して「誰が川を汚したの」というアクティビティを行い、筆者は龍江小の教員に対して、日本の環境教育では自然と触れ合うこと、感性を育むことが重視されている話をした後、さまざまな色に紅葉した10種類ほどの種類のカエデの仲間の葉を分類してもらい、グループでそれ

ぞれに気に入った名前を付けてもらうというアクティビティを行った。

その後、2006年3月に学習院大学東洋文化研究所の中国の教育改革研究プロジェクトのメンバーとして再訪し、さらに3度目の訪問は同年6月に江蘇綠色之友が主催し、シェル中国有限会社が資金提供した南京市の教員を対象にした環境教育研修会に講師として招かれた。

これら3回の訪問を通して、龍江小で活発な環境教育実践が実現できている大きな理由に徐々に気付くようになった。それは、龍江小、江蘇省環保宣教中心および江蘇綠色之友の三者が相互に緊密な連携を図りながら協力して環境教育を進めているということであった。そこで、2006年8月に北海道で開かれた日本環境教育学会第17回大会のプロジェクト研究「東アジアの環境教育実践」の発表者の一人として江蘇省環保宣教中心で綠色学校支援の責任者をしている宋振亜氏を招き、三者の連携について発表してもらった。

今回、この報告をまとめるに当たっては、事前に龍江小、江蘇省環保宣教中心、江蘇綠色之友の三者に連絡して関連する資料の準備をしてもらった上で、2008年3月15日に共著者4人と江蘇綠色之友の事務所で座談会を行った。

問い合わせ先 E-mail: tetsuo.suwa@gakushuin.ac.jp

本報告はその座談会における発言と提供された諸資料に基づいて、龍江小における環境教育の実態と学校・行政・環境NPOの連繋のあり方を日本の環境教育関係者に紹介することで、日本における学校・行政・環境NPOの連繋関係構築の一助になることを目的としたものである。

記述にあたっては、第Ⅱ章は龍江小の立場からの記述、第Ⅲ章は江蘇省環保宣教中心の立場からの記述、第Ⅳ章は江蘇綠色之友の立場からの記述という形式を採用した。(諏訪)

写真1 南京での座談会の様子(右より宋振亞、王麗娜、朱照明、吳銀立の各氏)

Ⅱ 龍江小学校における環境教育

1. 龍江小における環境教育の展開

龍江小は南京市の中心部から北西約2キロに位置する、全20クラスからなる小学校で、1996年に開校した比較的新しい学校である。この学校が環境教育に取り組むようになったのは、1999年に着任した吳銀立が翌年教科室主任となり、環境教育を龍江小の教育活動の柱にすることを提案したのがきっかけである。そして、2002年には南京市の「綠色学校」に申請し、認定された。しかし、龍江小の環境教育が活発になったのは、2003年に朱照明が校長に着任し、環境教育に積極的に取り組む方針を明確にするようになってからである。朱照明は、それまで南京市の「綠色学校」第一号(1999年認定)の江蘇省教育学院附属小学校で副校長をしており、龍江小に移ってからは、吳銀立教科室主任とともに環境教育のより一層の

強化に取り組み、2004年には江蘇省の「綠色学校」に申請し、認定された。教科室主任の提案が受け入れられたことから、もともと龍江小には環境教育に前向きな教員が多かったことは確かであるが、朱照明校長の下で、退職教員の補充人事でも環境教育に熱心な教員を採用してきたので、教員全体が環境教育に熱心に取り組む姿勢を見せている。

江蘇省の「綠色学校」認定申請にあたっては、「綠色学校」の認定をすでに受けた他の学校の取り組みも参考にしたが、江蘇省環保宣教中心からもさまざまなアドバイスをもらった。さらに課外活動における環境保護活動の展開などでは環境NPO江蘇綠色之友の支援を受けてきた。

現在、龍江小では通常の授業で環境意識の浸透を図るほかに、校本課程(学校が定める課程)で「環境」の授業行っており、毎週水曜日の5時間目が1年から6年までのすべてのクラスで「環境」に充てられている。すべての学年のすべてのクラスに「環境」の授業があるので、全教員が環境教育にしっかりと取り組まざるを得ない状況にあるともいえる。参考までに以下に2年1組の時間割を示す。

表1 龍江小学校2年1組の時間割

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
8:00~	朝会	朝会	朝会	朝会	朝会
8:10~	体操	体操	体操	体操	体操
8:25~ 9:05	国語	数学	数学	数学	国語
9:15~ 9:55	健体	国語	国語	国語	数学
10:05~ 10:50	音楽	美術	活動	品德生活	美術
11:00~ 11:40	数学	品德生活	英語	英語	国語
12:10~	昼休	昼休	昼休	昼休	昼休
13:30~	写字	写字	写字	写字	写字
13:45~ 14:25	国語	体育	環境	体育	
14:35~ 15:20		国語		音楽	

環境の授業を行うにあたって、龍江小では本文11ページ、付録の授業例を加えると総33ページからなる『龍江小学校環境教育校本課程実施綱要』（以下、綱要）を作成し、この綱要に沿って授業を展開している。綱要の本文は、第一部分が課程目標、第二部分が課程内容、第三部分が実施建議で構成されている。

第一部分の課程目標は総目標、分野別目標、年段別目標に分けて記述している。分野別目標では、環境知識、環境問題処理技能、環境意識、環境問題解決能力に分けて目標を設定している。このうち環境問題処理技能は、環境問題を解決する技能や技巧といった操作性を重視したものであるのに対し、環境問題解決能力は環境問題に対する認識能力、判断能力とともに積極的に環境を保護すること、環境問題などの解決に参加することも育むべき能力と捉えている。

年段別目標では、表2のように、低学年、中学年、高学年に分けて、分野別目標を具体的に記述している。

《中小生環境教育專題教育大綱》は、小学校段

階における目標や内容標準を1年～3年と4年～6年の2段階に分けているが、龍江小では3段階に分けている点に特徴があるといえるであろう。

また、児童に提示する授業の内容については、特に豊富で多彩な体験型活動で指導過程を充実させることを重視している。

2. 龍江小の環境教育の授業例

以下に、龍江小で実施しているさまざまな「環境」の授業のうちから3つ授業例を紹介して龍江小の環境教育の雰囲気的一端を伝えたいと思う。

【授業例1】美しい秋の葉（低学年）

(1) 指導目的

- ・児童が秋の葉の形状・色彩を観察するよう指導し、観察能力を養成する。
- ・児童の良好な聴講・会話の習慣を養い、聞き取り・学びとった語句で完璧な連続した話をすることができる。
- ・秋の落葉から秋の特徴を知り、心から大自然を愛する感情を育む。

表2 『龍江小学校環境教育校本課程実施綱要』中の年段別目標

	低学年（一・二学年）	中学年（三・四学年）	高学年（五・六学年）
環境知識	大自然の音・色彩・香り 大自然の興味深い変化 水の循環 大気 ゴミ 水・電気 リサイクル 周囲の環境 人間と動植物 生命維持の基本的要素 植物/森林	生物と非生物 空気汚染 生物およびその生活環境 生物の間の関係 生物の作用 人間と動植物の間の依存関係 水汚染 騒音公害	住居内の環境汚染 食品汚染 ビニール類による汚染 生活中の汚染（電磁放射・化学品・タバコ） 温室効果 オゾン層破壊 酸性雨 自動車排気ガス 粉塵 生態系 生物の多様性 野生生物およびその生存環境
環境問題処理技能	簡単な工具を使用して学校環境を緑化・美化する。 過去と現在の環境を比較する。	各環境問題の背後に隠された危機について考える。 環境保護の規範を制定する。	環境調査。 ポスター・小冊子などの宣伝品を作成する。
環境意識	児童の自然と環境に対する感受能力と感情を育成する。 児童が花・草・樹木を愛護する行動習慣を育成する。	地球をいとおしみ、児童の環境保護に関する責任意識を育成する。 児童の有益動物保護の行動習慣を育成する。	児童の持続的発展可能な意識を育成する。 児童の生態環境保護の行動習慣を育成する。
環境問題解決能力	活動と体験。	批判的思考。	実験と参与。

(2) 指導過程

i. 観察対象を発表し、愛好する気持ちをかき立てる。(略)

ii. 秋の葉の色彩と風に舞う姿を観察する。

a. 昨日、先生は皆さんと一緒に校内で秋を見ましたね。私たちは落ち葉を踏んで、外壁の辺りの小さな樹林を走り、木の葉が春や夏と異なっていることを発見しました。秋の木の葉はどのようになっていたでしょう？

文章(1)：秋、私たちは小さな樹林を走り、_____を見ました。

b. 秋風が秋の葉に吹き寄せました。私たちはどんな音を聞きましたか？

文章(1)の後に「_____を聞きました」を加えましょう。

c. 皆さんは次のように続けて話してみましよう。：秋、私たちは小さな樹林を走り、_____を見て、_____を聞きました。

d. 私たちはさらに、秋風の中で一枚一枚の秋の葉が木から落ち、空中で軽々と舞って、その後、軽々と大地に舞い落ちたのを見ましたね。木の葉がどのように落ちていったか見ましたか？

文章(2)ひとしきりの秋風が吹いて、木の葉は()と落ちました。

e. 会話練習の中で、「悄无声息(静かに音を出さず)」・「飄飄悠悠(ひらひらと)」を使うことを身に付けます。

f. 秋の葉は空中で舞っていましたが、その姿はどのようでしたか？

文章(2)の後に「秋風が吹いて、木の葉は()と落ち、まるで_____のようです」を加えましょう。

iii. 秋の葉を拾い、どの秋の葉が最も美しいかを比較する。(略)

iv. 秋の葉がなぜ落ちるのか理解し、その優れた仕組みを賛美する。(略)

v. 活動全体を振り返り、順序だてて述べる。(以下略)

【授業例2】紙の節約(中学年)

(1) 指導目的

・紙の原産地について理解し、紙が人々の生活と関連していることを理解する。

・自ら紙を節約する習慣を育成する。

・演劇・会話・想像・行動を通じて、児童の能力を養育する。

(2) 指導過程

i. ビデオによるイントロダクション(略)

ii. 木材の需要と森林減少についての討論(略)

iii. 短劇演技

a. 4人のグループに分かれて、生活における人々の紙に対する態度を短劇で表現する。(事前に各自が適切な役割に分かれて練習しておく)

b. 各グループが演じて最優秀グループを選出し、クラスを代表して演じる。

c. 4つのグループの演技者は十分な準備をし、審査員は各グループの第一列に坐る。

【短劇】

Aグループ：数名の小学生がかばんからノートを取り出し、各々が一枚ちぎって飛行機を折り、校庭で非常に興奮して飛ばしている。十分後、彼らは走って授業の教室に戻りながら、「次の時間にまた来いよ」と叫んでいる。しばらくして、空になった校庭にはポツリと紙飛行機だけが残されている。

Bグループ：一人の友達が苦心して考えながら作文を書いているが、ちょっと何文字か書いたものの不満なようである。そこで「ビリッ」と手でちぎってくずかごに捨てた。このようにしてくずかごの中はしばらくすると紙くずでいっぱいとなった。

Cグループ：夕食後、家族が次々と紙ナプキンをとって口を拭き、テーブルを片付けている母はさらに数枚をとってテーブルを拭き、足元のご飯粒さえもおばあさんがテーブル用の紙で取っている。

Dグループ：元旦が到来し、数名の児童が「明けましておめでとう」「明けましておめでとう」と叫んでいる。走り寄って、クラスメートにどんなプレゼントをするか相談している。彼らは小さな店に入り、すぐに各々が数枚の年賀状を手を持って走って出てきた。笑いながらしゃ

べって遠くへと走っていった。

- d. 審査員はその場で成績を付け、優秀な班を選出する。

- iv. 紙の節約のために何ができるのか意見を出して討論する。(略)

- v. 廃棄物を利用した作品制作 (略)

- vi. 全体の振り返り (総括)

【授業例3】ブタクサ (高学年)

(1) 指導目的

- ・周囲の環境を改善する実践的な活動に積極的に参与することができる。
- ・ブタクサ蔓延をコントロールする対策を出すことができる。
- ・対象の焦点を定めて、ブタクサ蔓延阻止のポスターの色彩やイメージを正確に表現することができる。

(2) 指導過程

- i. 問題背景を設定し、探究問題を提議する。(略)
- ii. 教師と児童で行動計画を制定する。(略)
- iii. 児童がブタクサ蔓延に関する材料を収集する：背景知識 (抜粋)

1. 何がブタクサか？
2. それらはどこから来たのか？
3. それらはどうやって南京に来たのか？
4. ブタクサの何が怖いのか？それらは如何にして生態系に影響するのか？
5. どんな動物がブタクサを食べるのか？
6. 如何にして別の生物に影響するのか？
7. 生存に適した土壌のpH値はいくらか？
8. ブタクサの蔓延はどれくらい速いのか？

ブタクサの影響

1. どのように人間の生活に影響するのか？
2. どのように農業生産に影響するのか？
3. どのように食物連鎖に影響するのか？
4. 次の五年間で、ブタクサは環境状況にどのような影響を発生させるのか？

ブタクサ蔓延の防止策 (抜粋)

1. ブタクサの数量は、1988年以来如何にして増えてきたのか？
2. 市民団体は、人々にブタクサの蔓延阻止行動に参加させることができるか？

3. 科学者たちはブタクサの増加を防ぐ新たな方法を見つけたのか？

4. こうした解決方法は環境の安全を保証できるのか？

5. ブタクサをなくし、かつ生態系に影響しない科学的な方法があるのか？

- iv. 教師がインターネット情報を提供する。(略)

- v. ブタクサ蔓延阻止のビジュアル作品の制作 (略)

- vi. 作品鑑賞 (略)

3. 課外活動における環境保護活動

環境教育に力を入れている教員の指導の下で、課外活動として環境保護活動に取り組んでいる児童も少なくない。シェル中国有限会社の資金提供を受けて江蘇緑色之友が展開している江蘇美境行動にも児童のグループがさまざまな行動提案を作成して応募しており、この数年、本校からは複数のグループが入賞している。また、そのような児童の活動を積極的に支援しているということで、2006年には呉銀立教科室主任が、そして2007年には朱照明校長が江蘇美境行動伯樂（人材の発掘に長じている人）賞を受けた。また、「美しく新しい学校を設計する」という方案で、龍江小自身が2007年の江蘇美境行動功績賞を受賞した。

写真2は、2006年に「緑色消費」活動で優秀方案設計賞を受けた本校の児童が、化粧品品の品質保証期間についてどの程度消費者が認識しているか、また年間にどのくらいの化粧品を購入しているかについてインタビューしている場面である。このグループはそのような調査活動の結果として、①化粧品の品質保証期間を全く認識していない人は多いわけではないが、1～2回しか注意して見たことがない人が6割近くを占めていたこと、②平均すると年間に7.4回化粧品を購入しており、ダブって購入したり、購入したけれどあまり使わなかったものがかなりあること、などを明らかにした。そして、化粧品の品質保証期間をしっかりと認識することと、必要以上に買いすぎないことなどを呼びかける宣伝活動も実施している。因みに、副賞としてもらった賞金2,600元（約4万円）の支出報告は以下のようにになっている。

宣伝費用	500 元
活動費用	600 元
専門家の招請や訪問	500 元
貧困地区への物品寄贈	1,000 元

なお、2007年の江蘇美境行動に応募した本校の「廃物利用で廃物を宝に変える」活動は優秀方案設計賞と優秀方案実施賞をダブルで受賞している。（朱照明・呉銀立）

写真2 「緑色消費」活動のインタビュー風景

Ⅲ 江蘇省環保宣教中心と「綠色学校」

1. 「綠色学校」の多い江蘇省

「綠色学校」は《全国環境宣傳教育行動綱要（1996－2010年）》に盛り込まれた行動計画の一つで、一定の条件を備えた学校を「綠色学校」と認定することで学校における環境教育の活性化と環境保護意識の一層の向上を目指したものである。中国全体で現在約1万7000校認定されているが、表3に示したように江蘇省の「綠色学校」は全国の4分の1以上を占めており、「綠色学校」が非常に多い省であると言える。江蘇省内の各学校、特に学校の運営方針決定という点で大きな影響力を持つ校長や主任が環境教育の活性化と環境保護意識の向上に前向きであったことが、このような数字になっている大きな理由である。しかし、江蘇省環保宣教中心が各学校に「綠色学校」化を強く促し、場合によっては、「綠色学校」化に要する資金を調達できるように学校と企業を繋ぐ役割を果たしてきた結果であると多少は自負している。

例えば、蘇州市芦墟鎮小学校の場合、綠色学校化したいという校長の意向を受けた江蘇省環保宣教中心の綠色学校所管部門が、さまざまなアドバイスをするとともに、ソフト面の充実のために環境教育NPOに協力を要請し、地元企業に対しては資金の提供を要請して綠色学校化を果たした経緯がある。江蘇省環保宣教中心としては、このように異なる組織を「繋ぐ」ことが環境教育の普及において有効であると考え、力を注いできた。

表3 江蘇省の「綠色学校」数(2008年1月時点)

分 類	綠色学校数
国 家 表 彰	54
省 級	912
地 方 ・ 市 級	2,012
県 ・ 区 級	1,520
合 計	4,498

現在でこそ江蘇省の環境教育はかなり活発になっているが、1995年ごろまでは普及率が低く、江蘇省内でわずかに32校が指定されて環境教育に取り組んでいた程度である。しかも環境に関する専門的な知識を詰め込むだけで、環境意識を変えるにはほど遠いもので、子どもたちはほとんど関心を示さなかった。その後、環境保護庁と教育局が協力して、日本や台湾、ヨーロッパなどの環境教育実践を参考にして資料を作っていた。そして97年には各学校で環境教育を導入しやすく

写真3 江蘇省で1997年に作られ環境教育教材

することを目的として小学校3冊、中学校1冊からなる環境教育教材を作成した。(写真3参照)

他方で、2000年からは「緑色学校」の増加にも力を入れるようになり、最初のうちは江蘇省級の「緑色学校」を年に100校程度、2004年からは毎年120～160校を認定して、現在の900余校に至っている。

2. 「緑色学校」の認定条件

江蘇省環保宣教中心はより多くの学校が「緑色学校」化していくことを望んでいるが、中身が「緑色学校」の名に値するものでなければならない。そこで、以下のような、かなり厳しい評価基準を設けている。

江蘇省省級「緑色学校」評価基準

1 組織管理

- ① 指導層が環境教育を重視し、着実に取り組み、各部門が協力して全体的に推進している。
- ② 明確な目標の下で計画方案を立て、報告を実施している。(2005－2007年)
- ③ 運営制度、運営方針があり、定期的に自己評価を行い、その書類管理を規範化している。
- ④ 教育に必要な経費を調達し、教師の育成や地域との交流に一定の資金を投入している。

2 環境教育課程およびテーマ学習

- ⑤ 各科目に環境教育を着実に導入している。
- ⑥ 各学年で、教科を越えた環境教育活動を展開している。
- ⑦ 環境教育テーマ学習またはテーマ講座を開設している。
- ⑧ 地方課程または校本課程における環境教育を開発している。
- ⑨ クラスや生徒が普遍的に各種の環境教育のテーマ活動に参加している。
- ⑩ 多様な活動形式や豊かな内容を用いて、生徒の心身の発展に役立っている。
- ⑪ 学校、家庭、地域の環境に関心を持たせ、生徒に環境保護活動に参加するように指導している。

3 学校の環境管理及び資源やエネルギーの節約

- ⑫ 環境管理を学校管理の総合目標の中に入れている。
- ⑬ 相応しい環境管理目標、計画、方針と基本規定制度ができている。

⑭ 資源、エネルギーその他の物質(水、電気、……)の節約を推進している。

⑮ 学校の緑化、浄化、清掃に努め、教師と生徒が生態環境、動植物を保護している。

⑯ ゴミを分別し、減量化、無害化、資源化を進めている。

⑰ 教室や事務室、食堂等からの排気汚染、排水汚染、騒音汚染がないようにしている。

⑱ 学校の特色ある環境文化を作り上げている。

⑲ 教職員や生徒がともに緑色生活、緑色消費を自ら実施している。

4 環境教育の功績

⑳ 環境教育や環境実践活動に参加して、様々な賞を10以上獲得している。

㉑ 学校自身が環境に関する校本課程を開設し、教材を作っている。また、教師が環境教育関連の論文を5つ以上発表している。

㉒ 資源、エネルギーを節約した功績が顕著である。

㉓ 学校の環境を改善するための計画や方針、資金投入を行って、良好な成果を挙げている。

㉔ 教員や生徒の環境認識、態度、価値感、責任感および環境保護への参加能力が良好である。

上記の各項目は24を除いてすべてAからDの4段階で評価し、8項目以上にわたってCがある場合、Cが5項目以上でさらにDの項目がある場合、第3項がDの場合などは、あらかじめ第一段階で申請が退けられる。第一段階の書類審査で通過した学校については、第二段階の学校現場評価が行われる。そこで問題点が見つかったような場合には改善意見が出され、その改善が確認できた段階で「緑色学校」に認定される。上記の評価基準を見ていただければ、江蘇省環保宣教中心が単発的な環境教育を実施するだけでなく、組織的な持続性を持った環境教育への取り組みを求めていることを理解してもらえらるであろう。因みに2007年には江蘇省では省級の「緑色学校」を新たに165校認定した。(宋振亜)

IV 江蘇緑色之友と江蘇美境行動

江蘇緑色之友は、1998年に設立された民間の環境保護組織で、当初は4～5人で活動を始めたが、現在は9人の専従職員と13人のボランティア

ア（交通費のみ支給）を擁する規模になっている。

環境保護に関わる活動全般から地域のお年寄りに若者が食事を提供する「居家養老」という活動まで幅広く手がけているが、環境教育に関わる活動としては、年に10回から12回の環境教育教員研修会を開催したり、児童生徒を対象にしたサマーキャンプや、ゴミ処理場や汚水処理場などの社会見学なども実施したりしている。キャンプは年に6回行っており、小学生の場合は1泊2日、中学生の場合は2泊3日のものを六合生態園という環境教育基地で実施している。

2004年から取り組み始めて、次第に大きな活動になっているのが江蘇美境行動である。美境行動はシェル中国有限会社が資金援助して最初香港で始まったが、それを江蘇省でも展開するようになったものである。最初は小中学生の優れた環境保護活動計画に対して「優秀法案設計賞」と副賞として若干の活動費を提供して、行動に移すことを期待した活動であった。それが2006年度からは「優秀方案実施賞」を設けてその後の実施にも表彰するようにしたほか、「優秀指導教師賞」や「伯樂賞」などを設けて、子どもたちに対する指導

者の積極的な働きかけをも賞の対象にするようになっている。

2007年には江蘇省の397校の小中高校と大学がこの活動に応募しており、参加者は19,680人に上り、応募された方案は1530件、うち689件が実施されている。この活動の意図を理解してもらうために、表4に優秀方案設計賞の評価基準（2008年の場合）を示す。

環境NPOがこのような活動を行うには当然資金が必要である。江蘇緑色之友の場合、江蘇美境行動におけるシェル中国有限会社などの企業からの資金援助のほかに、公的機関や地域からの援助もあるが、大きな比率を占めているのは各界の有力者からなる理事の、個人的収入の提供である。

（王麗娜）

V まとめ

以上、龍江小の環境教育の一端と、それを側面から支えている江蘇省環保宣教中心や江蘇緑色之友の役割を簡単に紹介したが、この例は中国の中でも非常に連携が上手くいっている稀な例といえるであろう。

江蘇省は上海の西隣の省で、南京や蘇州、無錫といった古い歴史を持つ都市を多数擁しているが、近年の猛スピードの工業化によって、大気汚染や水質汚濁が急速に進行している。それだけに、環境教育の必要性を感じている学校関係者が多く、緑色学校を目指す動きも活発で、全中国でも突出した緑色学校数となっている。皮肉なことであるが、工業化による経済発展が、間接的に多くの学校の緑色学校化を経済的に支えているという面もある。

しかし、このような連携の広がりによって、中国の環境教育はじわじわと大きなうねりとなってきているように感じている。日本でもこのような連携から学ぶべき点が多々あるように思っている。

（諏訪）

表4 江蘇美境行動の優秀方案設計賞の評価基準

評価要素	配点	評価の内容
科学性	20点	方案の観点が科学的で、内容が論理に符合し、十分に推敲されている。
	20点	方案の目的が明確で、進め方がはっきりしており、仕組みが整っている。
実現可能性	20点	取り上げた問題が学校生活、家庭生活、地域生活と密着しており、心身の発展特性と認知能力に適合している。
	20点	方案が広めやすいもので、周囲の環境改善という現実的具体的な意義を持った内容である。
斬新さ	10点	方案の視点が独特で、考え方が斬新である。
	10点	実施方法や実施プロセスに創意工夫が見られる。
総合評価	100点	全体評価